

マルソウダ *Auxis rochei*

県内では一般にメジカと呼ばれます。これは、目が口の先端から近い位置にあることに由来すると言われていています。幼魚は新仔（シンコ）あるいはローソクメジカと呼びます。多くは土佐清水市で節に加工され、宗田節としてうどんやそばのダシなどに利用されます。鮮魚としても茹で節や塩焼きなどに利用されます。



生物特性

マルソウダは全世界の温帯から熱帯域に広く分布します。日本近海に現れるマルソウダは、冬に南シナ海で生まれる南方系群と、夏に日本近海で生まれる日本近海系群から構成されています。

発育初期の成長はきわめて速く、生後45日で尾叉長18.0cmに達します。その後、0.5歳で25.0cm、1歳で29.0cm、1.5歳で33.5cm、2歳で35.5cm、2.5歳で37.0cmに成長します。寿命は3歳未満です。高知県周辺における主産卵期は6～7月で、1歳と1.5歳が主に産卵します。

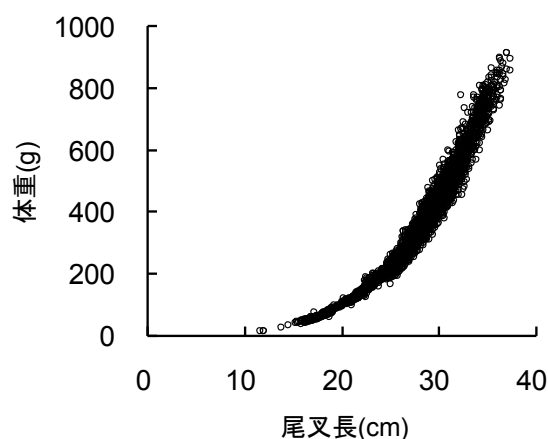


図1 高知県産マルソウダの尾叉長と体重の関係（平成7～8年の測定データに基づく）。

県内の漁獲動向

高知県内におけるマルソウダ漁獲量は、昭和52年(1977年)に3,935トンの最低値を記録し、その後増加しました。近年は7,200トン～10,700トンの範囲でやや減少傾向にあり、全国のマルソウダ漁獲量の推移とほぼ同じ傾向にあります(図2)。なお、都道府県別にマルソウダの漁獲量をみると、高知県が突出して1位であり、実に全国漁獲量の4～5割を占めています。

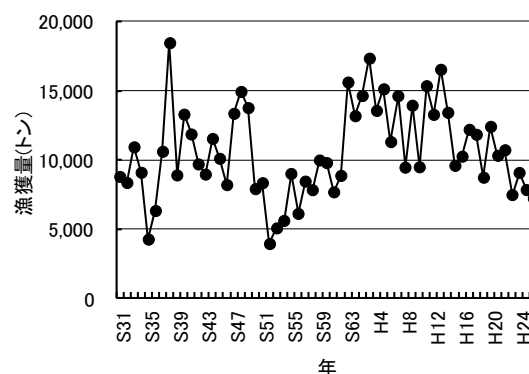


図2 高知県下におけるそうだがつお類漁獲量の推移。統計上、マルソウダとヒラソウダが含まれるが、実際にはほとんどマルソウダの漁獲量(約99%)と考えられる。

県内では、主に足摺岬周辺の曳縄漁と、各地の定置網により漁獲されます。曳縄漁では、夏を除く 11～翌年 6 月が主漁期で、秋メジカ漁と春メジカ漁に分かれます（図 3）。定置網では 5～6 月に多く漁獲されます。（図 4）。

マルソウダ漁獲量を長期的にみると、その変動幅はマイワシなどに比べて小さく、安定しています（図 2）。これは、1)寿命が短いこと、2)漁獲対象となる系群が 2 つ存在すること、の 2 点が原因と考えられます。つまり、複数の系群が短いサイクルで入れ替わるため、長期的に不漁になるというようなことが起こりにくいのです。

一方、年ごとの漁況変動は、生まれた子供（新仔）がどれくらい加入してくるか、ということと、黒潮の離接岸により左右されます。7 月下旬から、西日本の各地に尾叉長 10～20cm のいわゆるローソクメジカが加入してきます。これらの加入時期が早く、量が多ければ、その年の加入水準が高く、秋以降に好漁が見込めると判断できます。逆ならば加入水準が低く、不漁の懸念があります。また、特に春漁では、黒潮が接岸すると好漁になり、逆に離岸すると不漁になる傾向があります（図 5）。黒潮が接岸すると、1) マルソウダが好む水域が沿岸域に集約すること、2) 底層の水温が低下することによって魚群が浮上すること、が理由と考えられます。

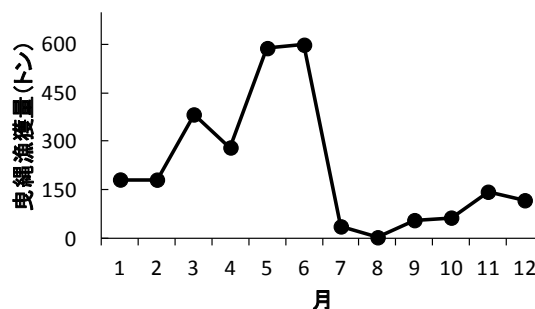


図 3 高知県漁協下ノ加江支所の曳き縄によるマルソウダの月別漁獲量。平成 18～27 年の平均値で示す。

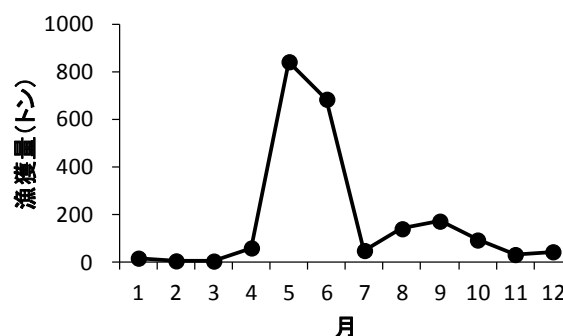


図 4 高知県漁業協同組合所属の大型定置網によるマルソウダ月別漁獲量。平成 21 年 4 月～平成 27 年 12 月の平均値で示す。

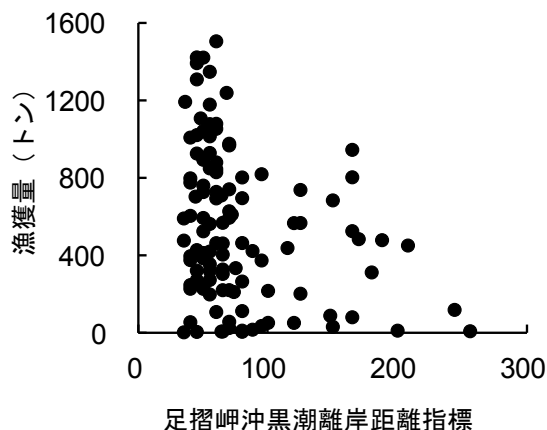


図 5 昭和 62 年～平成 17 年における足摺岬沖の月別黒潮離岸距離指標と、同月のマルソウダ漁獲量の関係。各年の 1～6 月について示す（梶・田ノ本（2007）を改変）。